

「とむとじえりー」

伊藤 ゆかり

「出演：猫♂、ハムスター♂、子供♀」

■子供部屋

SE 揺れる物音

じえりー 「ん？ なんだ？ 地震か？」

SE 走ってくる足音

子供の声 「じえりー、ただいま〜」

じえりー 「おう、ミカか、おかえり！ なんだ、ミカの足音で棚が揺れていたんだ……。びっくりしたぜ、ミカ！ といっても、人間にはネズミのおいらの声なんて聞

こえないか……」

子供の声 「あのねえ、今日はじえりーにお友達をつれてきたんだよ〜」

じえりー 「え、友達！？ まじで？ 女の子だったりして……かわいいこだったらいいなあ。小さくて、毛並みがつややかで、目が大きくてぱっちりしたこ。性格もやさしくて、菓作りが上手で、清潔な……いや、さすがにこれは望みが高すぎだな。普通に仲良くなればそれでいいや。楽しみだなあ……」

子供の声 「じゃ、さっそくご対面。名前はとむ。今日からじえりーの家族だよ！」

SE 箱が開く音

じえりー 「あ、よろし……」

SE 打撃音

じえりー 「ヂュー……」

SE 倒れる音

とむ 「……獲物をとらえるときには、先手必勝……」

SE 勢よく起きる音

じえりー 「先手必勝じゃねえよ！？ 死ぬじゃん！ ……って、ね、猫お？ 友達って……新しい家族って、猫のことだったんだ……」

とむ 「ふむ、貴様が先住のねずみか。よろしくな。そして、さようならだ」

じえりー 「ヂュー！？ ちょ、ちよつと待てよ！ 家族だろ？ 友達だろ！？ おいら

達は、仲良くとか、目標を共にした——」

とむ 「ライバルか……」

じえりー 「違うよ！ って、なんで体を低くして獲物を狩る姿勢なんだよ！？」

とむ 「公園に捨てられてから三ヶ月、これが一番てつとり早いコミュニケーションだったのだが」

じえりー 「の、野良猫だったんだ……。で、でもさ、もう家猫なんだから、もっと、こう……フレンドリーに行こうよ、フレンドリーに……」

子供の声 「あ、わたしは出かけてくるからね。仲良くしていてよ〜」

じえりー 「ほ、ほら、ミカもあ言っていることだしさ、仲良くするってことで。握手」

とむ 「ふん、しかたがないな。ほれ、握手」

SE 鋭くつめを出す音

じえりー 「ひいいい!?! な、なんで爪を出すの?」

とむ 「こうでもしないと、貴様と握手ができませんではないか。まず手のひらのサイズ違うし」

じえりー 「うくん、まあ、しかたがないかあ」

SE チョイ、チョイと握手をする音

SE ヒョイ、と持ち上がる音

じえりー 「ヂュオ!? 握手している間に持ち上げるとこっちは体が浮くのですが……」

とむ 「うむ。そうしなければ、食うこともできまい」

じえりー 「食うなよ!? 今すぐ降ろせ!」

とむ 「では……あくん」

じえりー 「だから食うなってばよ! 床にすみやかに降ろしてください、お願いしますからあ!」

とむ 「そしたら、逃げるだろうが」

じえりー 「逃げませんって。君のごはん、箱の中にあるみたいだから、そっちを先に食べよ」

とむ 「なるほど、貴様は非常食になる道を選んだのだな」

じえりー 「うう……ミカが毎日ごはんを用意してくれますように……」

SE ぐはんを食べる音

とむ 「もぐもぐ……うむ、うまい。ちそうになった」

SE 種をかじる音

じえりー 「ふう、おいらもお腹いっぱいだあ」

とむ 「それでは、少し腹ごなしをすることにするか」

じえりー 「腹ごなし?」

とむ 「そうだ。まあ、ぶつちやけ、遊ぶことだが」

じえりー 「へえ、じゃあ、おいらも回し車で運動するかあ」

とむ 「待て。どうせ互いに走るのだから、一緒においかけっこをしよう」

じえりー 「……嫌だよ。どうせおいらを追いかけけるんだろ?」

とむ 「そんなことはない。君が俺を追いかけたまえ」

じえりー 「あ、それなら……」

SE 走り回る音

じえりー 「あははは、なんか、今までミカとしか遊んだことないから、新鮮だなあ」

とむ 「そうであろう、そうであろう。では……あくん」

じえりー 「つて、こらー! なんで口を開けて待ち構えているんだよ!」

とむ 「非常食を食べよう……」

じえりー 「今、非常事態じゃねえだろ!」

とむ 「いや、俺の本能が危険だと告げている」

じえりー 「ぶざけんな! あんたの腹の状態にくらべたら、おいらの方が危険だよ!」

とむ 「おかしいな……。じゃあ、なんでこんなに落ち着かないんだろう? なぜ、

こんなに走り回りたいと思ったんだろう? なぜ、食いたいと思ったんだろ

う？」

じえりー 「知らないよ、もう……。あゝあ、おいらは疲れたから、先に巣箱で休むね」

とむ 「待て！」

じえりー 「なに？」

とむ 「そっちは危険だ！ 俺の口の中に入れ！」

じえりー 「嫌だよ！ おいら死にたくないよ！」

とむ 「だったらなおさら、こっちへ来い！」

じえりー 「なんで!？」

とむ 「危険だからだ」

SE 唾を飲み込む音

じえりー 「なに、今の唾を飲み込む音!? 説得力ないよ！」

とむ 「ええい、時間が無い。俺から口に入れてやる！」

じえりー 「チュー!？」

SE ばくん、と食べられる音

とむ 「あゝゝ！ もう、駄目だ！」

SE 地震の音

SE 棚が倒れる音

じえりー 「な、なんだろう？ 今の音……って、あれ？ すぐに口から出られた……。

「こ、これは……」

とむ 「うむ、やはり俺の直感は正しかった」

じえりー 「本棚が倒れて、おいらの巣箱が潰れている……。ま、まさか、とむ。おいらを助けてくれたの……?」

とむ 「ふん……友、だからな……」

じえりー 「と、とむ……(感涙)。お、おいら涙で前が見えないよ。おいらたち、いい家族になれるな」

とむ 「……家族、か……。俺は今まで、天涯孤独だった。ミカが拾ってくれなければ、こんな気持ち、味わえなかった。きつとこれが、愛情、というのだろう。

「こんな俺と仲良くしようとしてくれて、ありがとう」

じえりー 「とむ……そんな……おいらこそ、実は友達ができたのは初めてなんだ。こんな風に話ができるようになって、とっても嬉しいんだ」

とむ 「じえりー……」

じえりー 「なんだい？」

とむ 「俺なりに、君に愛情をしめしたい」

じえりー 「な、なんだよ、照れるなあ……」

とむ 「まずは、目をつぶってくれ」

じえりー 「め、目か？」

とむ 「次に、顔を上げてくれ」

じえりー 「お、おう。ど、どきどきするな。まさか、キス——」

とむ 「最後にまたたびで味をつけて、頭からがぶりと……」

じえりー 「って、やっぱり食うつもりかゝゝゝゝい!!」